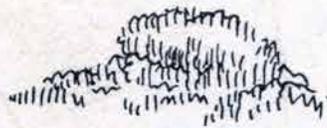


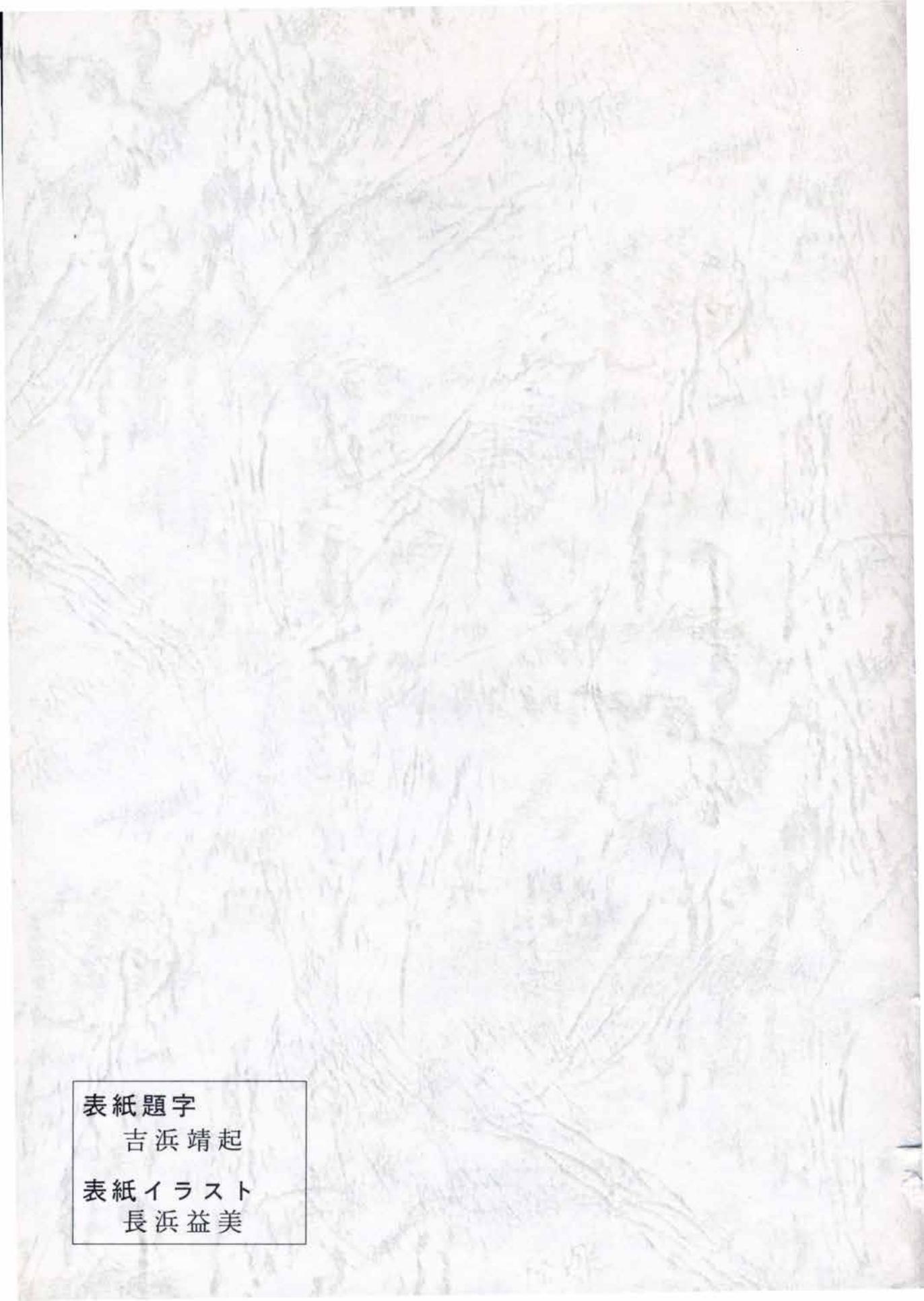
津嘉山森遺跡

— 文化財調査概報 —



1992年3月

沖繩市教育委員会



表紙題字

吉浜靖起

表紙イラスト

長浜益美

あいさつ

本概報は昭和63年度と平成2年度に実施した文化財調査の成果を記したものです。

調査は、民俗文化財、埋蔵文化財、記念物等の記録保存を行いました。残念な事に、遺跡の大部分は1970年代初頭の造成工事で僅かにしか残っておりません。

よって、先述の調査成果は「津嘉山森」の昔の面影をうかがい知る唯一の資料になると思われます。

本概報が郷土の文化を知る教材、及び学術研究などの資料として活用していただければ幸いです。

最後に今回の記録保存調査に際し、たずさわりました関係各位のご労苦に対し、心から深く感謝申し上げます。

平成4年3月31日

沖縄市立郷土博物館
館長 島袋俊信

目次

◇ はじめに	1
◇ 環 境	1
◇ 津嘉山森一帯の文化財	3
◇ 津嘉山森の植物	9
◇ 墓の調査	15
◇ 埋蔵文化財の範囲確認調査	18
◇ あとがき	19

はじめに

調査に至るまで

今回の調査は、協進産業（有限会社）による「古謝ゴルフ練習場建設」に伴う記録保存調査である。開発地の地番は、沖縄市古謝津嘉山原1219番地、外23筆、面積26,736.67m²を有する。

工事に先立ち、当教育委員会は事業計画者から文化財有無の調査依頼を受けた。照会時点ですでに津嘉山森遺跡と知念大屋久の墓跡が確認されていたので、その旨を当事者に報告し、その後、調整と協議を数回行い、この2件が分布する津嘉山森の残存部は、協進産業より現状保存の同意が得られた。

但し、津嘉山森遺跡に関しては遺跡の範囲が確定されてなかったので、埋蔵文化財の範囲確認調査を実施し、併せて植物調査、墓調査、聞き取り調査等も行った。

環境

沖縄市の位置

沖縄県は鹿児島島の南方約583Km、台湾の基隆から約644Km地点に位置する。本市は沖縄本島の中央部に位置し、本庁舎は東経127度48分、北緯26度19分にあり、那覇市の北方約22Kmの地点、車でおよそ1時間の圏内にある。

周辺の市町村として、東は具志川市、西に北谷町、嘉手納町、読谷村、南に北中城村、北は石川市、恩納村の7市町村に隣接する。地勢は、本市の字与儀から泡瀬二区一帯の東部地域を除けばおおむね丘陵台地で、地質は、珊瑚石炭岩土壌、泥岩土壌、国頭礫層土壌、沖積層土壌の四つに大別することができ、この地質分布は、本島北部と南部の境目と言われている。市域は東西7.64Km、南北13km。海拔は最高標高210m、最低標高0.1m。総面積48.70km²で、軍用地が39.49%の19.23km²となっている。

人口109,789/世帯数34,533(1991年12月1日現在)



津嘉山森の遠景（西より）



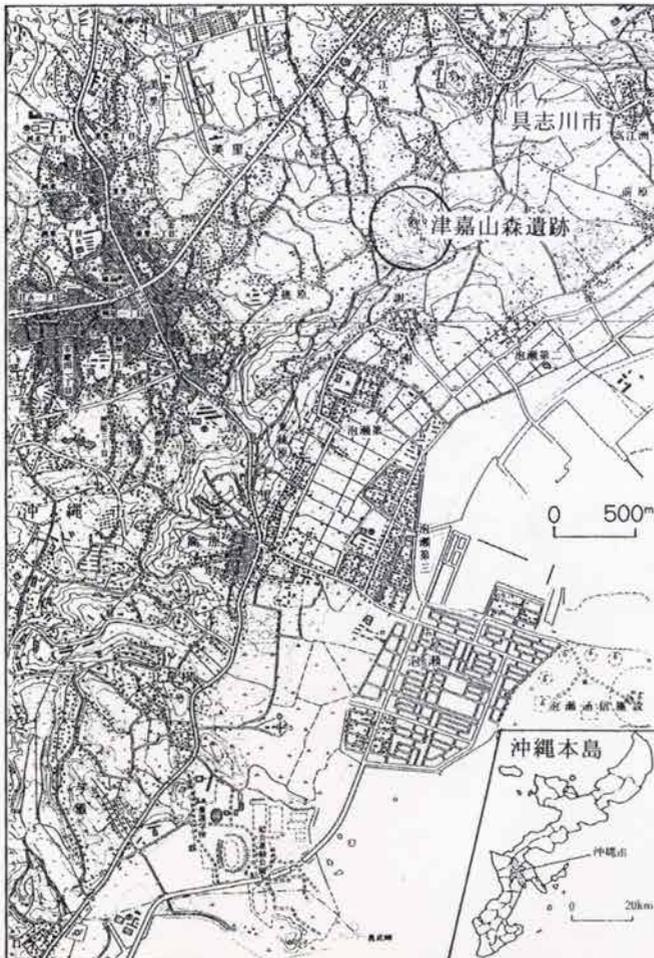
（北より）

津嘉山森一帯の環境

津嘉山森は沖縄市字古謝津嘉山原^{ちかさんばら}に位置する。丘陵斜面の北側は具志川市境界になり、字江洲部落と隣接する。

この一帯の地質は、「クチャ」と称する島尻層群に琉球石炭岩が被り、ボール状の孤立丘を形成する。字古謝の地元では「チカザンムイ」と称し、霊力（シジ）の高い山として恐れられている。伝承として、飛び安里伝説、古謝集落の古島^{ふるしま}（元島）等の口碑が残っており、その外にもかつては、知念大屋久の墓と津嘉山森墓碑、チカザンガー、古墓、防空壕跡などの文化財が分布していた。

このような文化財も1970年代初頭の造成、その後の開発、地主による移転等で、年々虫食い状態を呈し、現状は丘陵の頂上とその周辺に一部の文化財が保存されているにすぎない。



津嘉山森遺跡の位置



撮影計画機関 建設省国土地理院
 撮影年月日 昭和52年12月09日
 撮影原縮尺 約1/10,000
 撮影地区名 沖縄本島
 写真番号 COK-77-01-047B-

津嘉山森一帯の文化財

津嘉山森一帯の文化財は、民俗文化財と記念物が分布する。

《民俗文化財》

民俗文化財は、チカザンガー（津嘉山井）、知念大屋久の墓跡、津嘉山森墓碑、古墓、伝承等が確認されている。

チカザンガー

具志川市字江洲の産井。曾ては、旧正月の若水と子供が誕生の時に、この水を用いた。村の共同井で江洲集落に水道が普及する以前まで、生活用水として利用された。

空撮写真のポイント

- A チカザンガー
- B 知念大屋久の墓跡
津嘉山森墓碑（移転前）
- C 防空壕跡
- D 知念大屋久の墓（新築墓）
津嘉山森墓碑（移転後）



知念大屋久の墓（近景）



同 左



同上（墓口近景）

知念大屋久の墓

墓は丘陵の南西に位置する。琉球石炭を横穴状に掘り込んだ掘込墓で、墓庭は部分的に野面積の石垣で囲まれ、墓内の厨子甕は以前にのすらづみ移転されている。移転後の墓は、セメント作りの家型墓で旧墓南東約700mに所在する。

〔図面参照〕

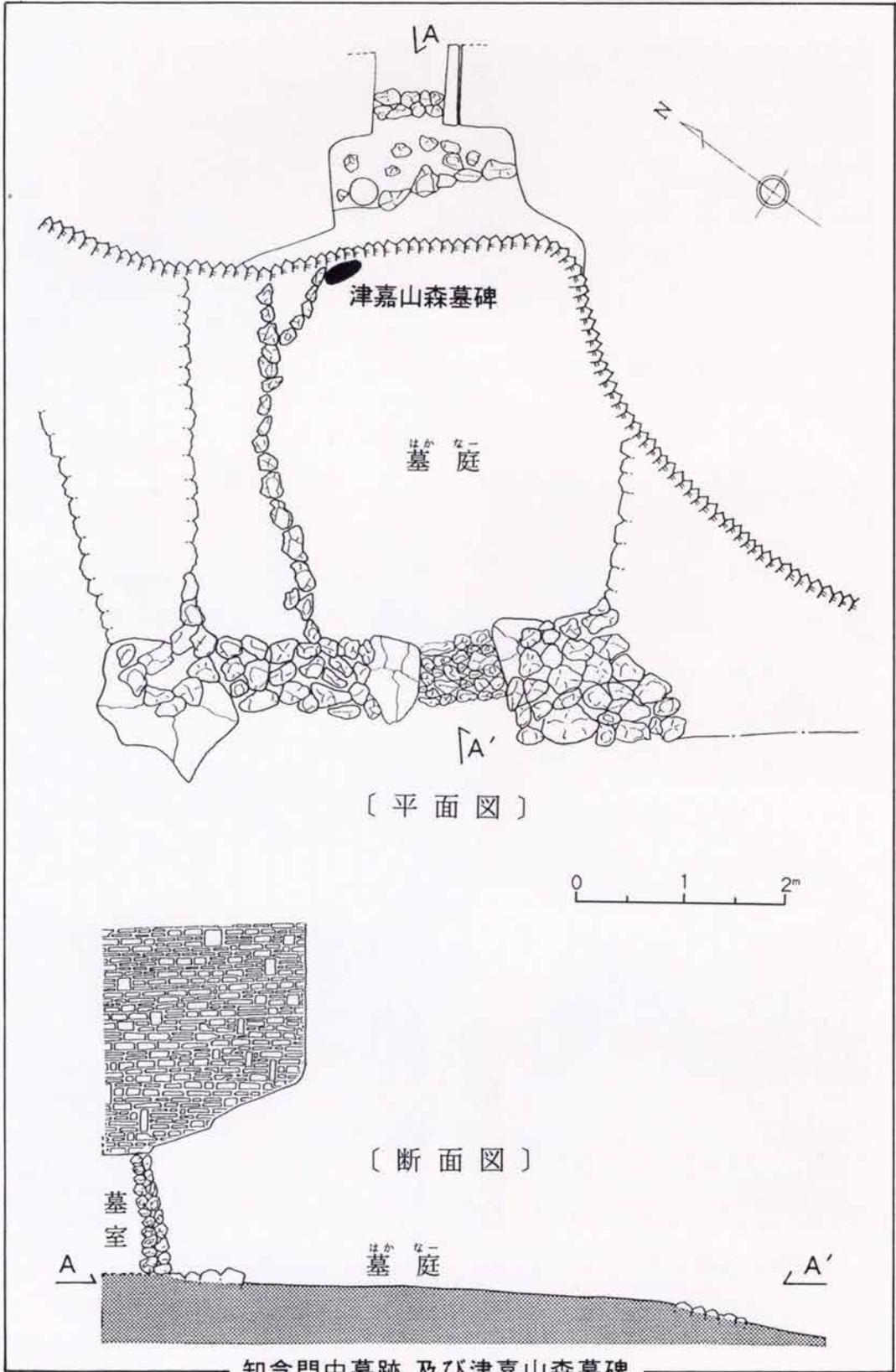
- ①知念門中墓跡、及び津嘉山森墓碑
- ②津嘉山森遺跡付近地形図



移転後の知念大屋久の墓（遠景）



同 左（近景）



津嘉山森墓碑

先述の旧墓顔面の左脇に建っていたが、この石碑も厨子甕移転の数年後に新築墓の墓庭入口、左脇に移動された。

石碑は1573年の建立、子孫への訓戒を石に刻んでいる。材質はニービヌフニー（細粒砂岩）を用いており、細粒砂岩は新築墓の位置する丘陵（俗称、^{うまぬなかり}馬の背）付近から、遠方南側の北中城村渡口一带にかけて産出する。

石碑の寸法は、長軸86cm、最大幅38cm、最大厚16cmを計り、身の正面には古文書体の崩し字で、平仮名と漢字混じりの文字が彫られている。文字の解釈はかなり難解だと言われるが、主な関係文献を2点挙げると、

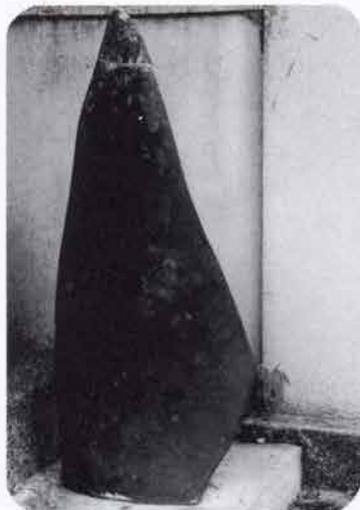
①沖縄市教育委員会 昭和59年3月20日「沖縄市史」第2巻 文献資料にみる歴史

②沖縄県教育委員会 昭和60年3月31日「金石文」歴史資料調査報告書V

…など、外にも散見されるがそれらは省略し、詳細は上記文献を参照されたい。

〔図面参照〕

- ①知念門中墓跡、及び津嘉山森墓碑
- ②津嘉山森墓碑の拓本及び実測図



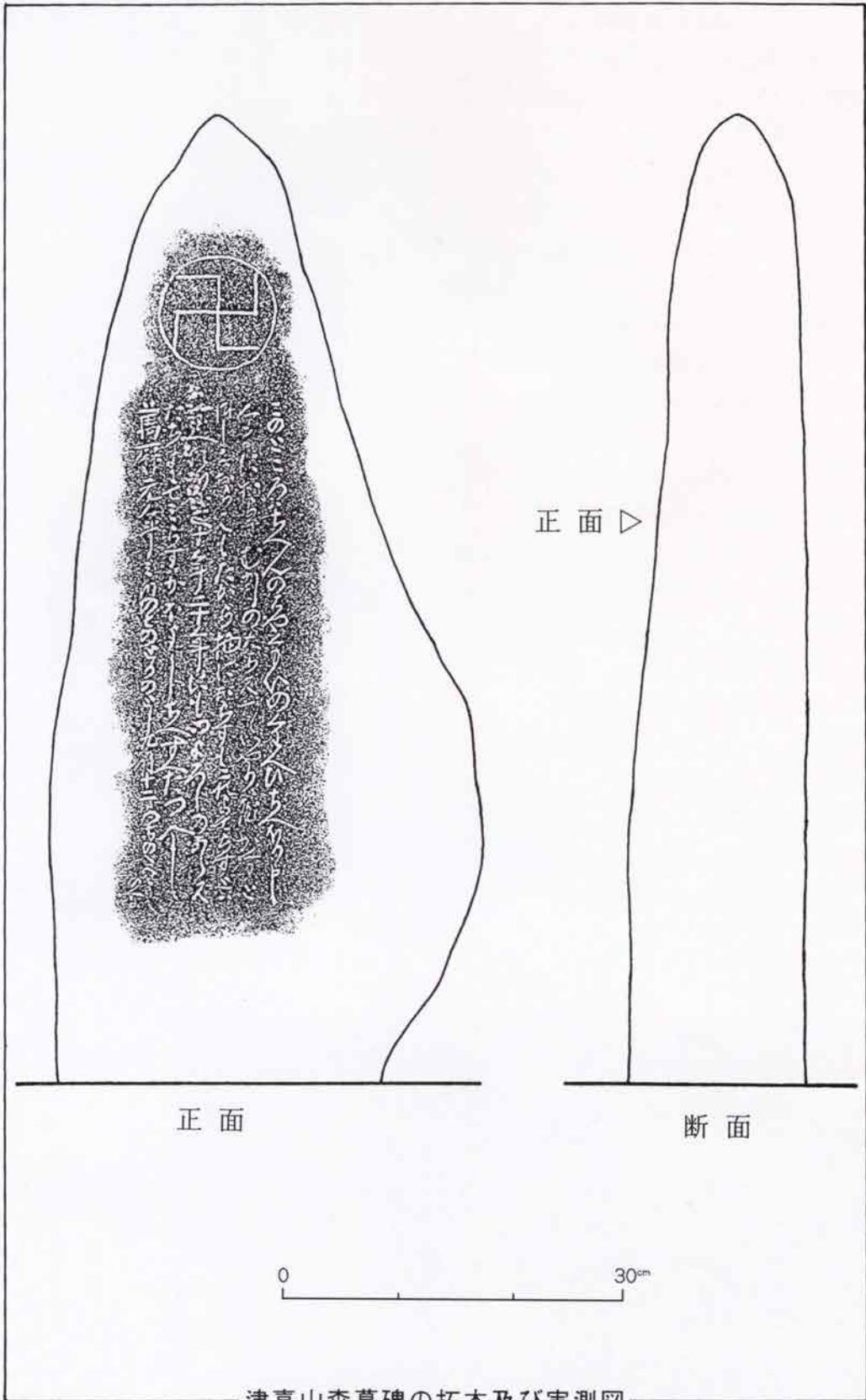
移動後の墓碑（近景）



移動前の墓碑（近景）



同上（近景）



津嘉山森墓碑の拓本及び実測図

伝 説

平成2年度に旧美里地区の民話調査を行った。現在、データ整理途中であるが、その中から津嘉山森関係を抜粋した。紹介資料は断片であるが以下、略述する。

古謝の始まり

話者1(知念善助/大正7年6月15日生/古謝)

美里近くに住んでいたアーシヌーアーヤーと呼ばれていた人が、泡瀬の塩田に塩炊きに通っていた。が、いつの頃からか津嘉山森の上原(ガスボンベ工場の西側)に移り住み、さらにそこから古謝の神アシャギのあるところに移り住むようになった。それが古謝部落の始まりであるような…。

古謝の部落の始まり

話者2(金城真良/明治40年7月14日生/古謝)

古謝の部落は今帰仁王(北谷王)の三男が古謝の西北、津嘉山森の方へ移ってきて住むようになってからである。

この今帰仁王の三男は、昼でも星の見えるウタキ、クムクウタキで神から武勇を教わっていたので、そのひとが使う空手(ティー)は神ディーといった。

チカザン森と飛び安里

話者3(嘉陽宗利/大正11年2月10日生/美里)

チカザン森から津嘉山の飛び安里という人が始めて飛行機の試しに飛んだ所である。

津嘉山森は火山

チカザンムイは火山と言って、具志川市江洲中原の人は家を新築する時、そこに向けては作らない。

《記念物》

戦時中、津嘉山森周辺は防空壕が分布していたと言われる。次に戦争遺跡として略述する。

防空壕跡

第二次世界大戦時の防空壕跡が戦後も数ヶ所分布していたが、近年の造成で破壊された。

その内1例は、1988年度に県営古謝団地隣の個人住宅建設に伴う掘削で出土したので、急きょ略測を行った。

防空壕跡は保存が極めて悪く、壕内も落盤で部分的に埋まっていた。この一帯に分布するクチャの地層を横穴状に掘り込んで形成し、残存部の走路は略南東←→北西の方向を向く。寸法は幅約2m前後、天井高は床面が大方埋まっていたので、計測不可能な状況であるが、大人が屈んで通れた。確認した位置は、県営古謝団地6号棟の西方約25mのポイントになる。

この一帯に曾て、防空壕が分布していたか、駐屯していた日本軍の部隊名等について、具志川市江洲部落で2名の方から話を伺った。

話者1

(福田文子/昭和2年11月25日生/具志川市江洲)

福田さんは父親が当時、部落の区長だったので、嘉手納町屋良の中飛行場と読谷村の北飛行場建設に伴う、入夫徴用事務の手伝いを行った。

昭和18年か19年頃に、江洲部落では山部隊が半年間駐屯していた。その部隊の防空壕が津嘉山森周辺に分布していたが、個数と位置は不明。兵隊は一般兵が公民館、階級が上の人は個人の家で宿泊し、半年後、沖縄市クルクー山付近に移動。その後、福田さんは父親と一緒にクルクー山の駐屯地へ慰門に行った事がある。

話者2 (宜保清三郎 / 大正15年1月30日生)

津嘉山森の東側一帯、江洲部落の茅毛 (茅葺の家を葺く時に用いるマカヤの生えている原野) に防空壕があった。ここでは戦死者も2~3名いたが、遺骨は戦後、郷里へ帰った。茅毛からは戦後も手榴弾、缶詰等が拾えた。

4. 調査結果

今回の調査で確認された植物は、42科80属93種で、その内訳は次の通りである。

津 嘉 山 森 の 植 物

はじめに

植物調査は伐採前に実施した。

調査地域は海拔60.00m~108.00mで、沖縄市立宮里小学校北東1kmに位置する (津嘉山森遺跡の位置図)。調査日数や実施の時期が限られているのでフロラとしては不備な点があることは否めないがその結果を報告する。



丘陵西側一帯の風景

1. 調査年月日 1988年9月12日

2. 調査場所 沖縄市字古謝津嘉山原

3. 調査方法

- ・調査は津嘉山森の裾から頂上部にかけて作られた歩道にそって出現した植物を記録した。
- ・頂上から見下し樹木の茂る所とススキ等の生育する所などを相観によって区分し、群落ごとに出現した種を記録した。

津 嘉 山 森 の 植 物 分 類 表

	科	属	種
シダ植物	4	6	7
裸子植物	1	1	1
双子葉植物	32	53	61
单子葉植物	5	20	24
計	42	80	93

〔シダ植物

Pteridophyta]

カニクサ科 Schizaeaceae

カニクサ

Lygodium japonicum Sw.

ワラビ科 Pteridaceae

ホウライシダ

Adiantum capillus - Veneris L.

リュウキュウイノモトソウ

Pteris ryukyuensis Tagawa

シノブ科 Davalliaceae

タマシダ

Nephrolepis auriculata Trimen

ホウビカンジュ

Nephrolepis biserrata Schott

オシダ科 Aspidiaceae

オニヤブソテツ

Cyrtomium falcatum presl

ホシダ

Thelypteris acuminata Morton

〔種子植物

Spermatophyta]

〔裸子植物

Gymnospermae]

ソテツ科 Cycadaceae

ソテツ

Cycas revoluta Thunb

〔被子植物

Angiospermae]

〔双子葉植物

Dicotyledoneae]

〔古生花被区

Archichlamydeae]

モクマオウ科 Casuarinaceae

モクマオウ

casuarina equisetifolia J.R.&G. Forst

クワ科 Moraceae

オオイタビ

Ficus pumila L.

ガジュマル

Ficus microcarpa L.f.

ケイヌビワ

Ficus erecta Thunb. var. *beeheyana* King

アコウ

Ficus superba Miq var. *japonica* Miq.

シマグワ

Morus australis poir

	イラクサ科	Urticaceae
ノカラムシ		<i>Boehmeria niva</i> Gaudich. f. <i>viridula</i> Hatusima
ヤナギヤブマオ		<i>Boehmeria densiflora</i> Hook. & Arn.
	ウマノスズクサ科	Aristolochiaceae
リュウキュウウマノスズクサ		<i>Aristolochia liukiuensis</i> Hatusima
	ヒユ科	Amaranthaceae
ノゲイトウ		<i>Celosia argentea</i> L.
	キンポウゲ科	Ranunculaceae
ヤンバルセンニンソウ		<i>Clematis tashiroi</i> Maxim.
リュウキュウボタンズル		<i>Clematis grata</i> wall. var. <i>ryukyuensis</i> Tamura
	クスノキ科	Lauraceae
ハマビワ		<i>Litsea japonica</i> Juss.
ヤブニッケイ		<i>Cinnamomum japonicum</i> Sieb.
	トベラ科	Pittosporaceae
トベラ		<i>Pittosporum tobira</i> Dryand ex Ait.
	バラ科	Rosaceae
オキナワシャリンバイ		<i>Rhaphaiolepis indica</i> Lindl. var. <i>insularis</i> Hatusima
	マメ科	Leguminosae
ソウシュジュ		<i>Acacia confusa</i> Merr.
ギンネム		<i>Leucaena leucocephala</i> de wit
ハカマカズラ		<i>Lasiobema japonica</i> de wit
メドハギ		<i>Lespedeza cuneta</i> G. Don
オジギソウ		<i>Mimosa pudica</i> L.
タイワンクズ		<i>Pueraria montana</i> Merr.
	ミカン科	Rutaceae
シイクワーサー		<i>Citrus depressa</i> Hay.
サルカケミカン		<i>Toddalia asiatica</i> Lamk.

	トウダイグサ科	Euphorbiaceae
オオシマコバンノキ		<i>Breynia officinalis</i> Hemsl.
クロトン		<i>Codiaeum variegatum</i> Bl.
ツゲモドキ		<i>Drypetes Karapinensis</i> Pax & Hoffm.
アカメガシワ		<i>Mallotus japonicus</i> Muell. - Arg.
オオバギ		<i>Macaranga tanarius</i> Muell. - Arg.
カンコノキ		<i>Glochidon obovatum</i> S. & Z.
	ウルシ科	Anacardiaceae
ハゼノキ		<i>Rhus succedanea</i> L.
	ニシキギ科	Celastraceae
ハリツルマサキ		<i>Maytenus diversifolia</i> Ding Hou
マサキ		<i>Euonymus japonicus</i> Thunb.
	アワブキ科	Sabiaceae
ヤンバルアワブキ		<i>Meliosma oldhamii</i> Maxim. var. <i>rhoifolia</i> Hatusima
	クロウメモドキ科	Rhamnaceae
ヒメクマヤナギ		<i>Berchemia lineata</i> DC.
	ブドウ科	Vitaceae
アマミズタ		<i>Parthenocissus heterophylla</i> Merr.
	アオイ科	Malvaceae
オオハマボウ		<i>Hibiscus tiliaceus</i> L.
フヨウ		<i>Hibiscus mutabilis</i> L.
	アオギリ科	Sterculiaceae
アオギリ		<i>Firmiana simplex</i> W. F. Wight
	ジンチョウゲ科	Thymelaeaceae
アオガンピ		<i>Wikstroemia retusa</i> A.Gray
[後生花被区	Metachlamydeae]	
	ハイノキ科	Symplocaceae
クロキ		<i>Symplocos lucida</i> S. & Z.

	モクセイ科	Oleaceae
シマトゴ	<i>Fraxinus floribunda</i> Wall.	
ネズミモチ	<i>Ligustrum japonicum</i> Thunb.	
	キョウチクトウ科	Apocynaceae
リュウキュウテイカカズラ	<i>Trachelospermum asiaticum</i> Nak.	
	var. <i>brevisepalum</i> T. Tsiang	
	ガガイモ科	Asclepiadaceae
サクララン	<i>Hoya carnosia</i> R. Br.	
	ヒルガオ科	Convolvulaceae
ノアサガオ	<i>Ipomoea acuminata</i> Roem. & Schult.	
	クマツヅラ科	Verbenaceae
ハマクマツヅラ	<i>Verbena litoralis</i> H. B. K.	
	シソ科	Labiatae
ヤンバルククルマバナ	<i>Leucas javanica</i> Benth.	
	ナス科	Solanaceae
ヤコウカ	<i>Cestrum nocturnum</i> L.	
	オオバコ科	Plantaginaceae
オオバコ	<i>Plantago asiatica</i> L.	
	アカネ科	Rubiaceae
リュウキュウヨツバムグラ	<i>Galium gracilena</i> Mak.	
ヘクソカズラ	<i>Paederia scandens</i> Merr.	
	スイカズラ科	Caprifoliaceae
ゴモジュ	<i>Viburnum suspensum</i> Lindl.	
サンゴジュ	<i>Viburnum oboratissimum</i> Spr. var. <i>awabuki</i> k. koch	
	キク科	Compositae
ホウキギク	<i>Astr. subulatus</i> Michx.	
タチアワユキセンダングサ	<i>Bidens pilosa</i> L. var. <i>radiata</i> Scherff.	

シマフジバカマ	<i>Eupatorium luchuense</i> Nakai
ホソバワダン	<i>Ixeri lanceolata</i> Steff.
アキノキリンソウ	<i>Solidago vigaurea</i> L. var. <i>insularis</i> Hats.

[単子葉植物 Monocotyledoneae]

	イネ科	Gramineae
ダンチク	<i>Arundo donax</i> L.	
ホウライチク	<i>Bambusa glaucescens</i> Sieb. ex Merr.	
アイダガヤ	<i>Bothriochloa glabra</i> A. Camus ssp. <i>haenkei</i> henr.	
リュウキュウヒメアブラスキ	<i>Bothriochloa parviflora</i> ohwi var. <i>spicigera</i> ohwi	
ジュズダマ	<i>Coix lacryma - jobi</i> L.	
オヒシバ	<i>Eleusine indica</i> Gaerth.	
チガヤ	<i>Imperata cylindrica</i> Beauv. var. <i>major</i> C. E. Hubb.	
イトススキ	<i>Miscanthus siensis</i> Anders. var. <i>gracillimus</i> Hitch.	
ススキ	<i>Miscanthus sinensis</i> Anders	
エダウチチヂミザサ	<i>Oplismenus compositus</i> Beauv.	
タチスズメノヒエ	<i>Paspalum urvillei</i> Steud.	
ナビアグラス	<i>Pennisetum purpureum</i> Schumach.	
ハイキビ	<i>Panicum repens</i> L.	
イタチガヤ	<i>Pogontherum crinitum</i> kunth	
シマスズメノヒエ	<i>Paspalum dilatatum</i> poir.	
ネズミノオ	<i>Sporobolus fertilis</i> w. D. Clayton	
コウライシバ	<i>Zoysia tenuifolia</i> Willd.	
	カヤツリグサ科	Cyperaceae
コゴメスゲ	<i>Carex brunnea</i> Thunb.	
テンツキSP		
ヒメヒラテンツキ		
	サトイモ科	Araceae
クワズイモ	<i>Alocasia obora</i> Spach	
	ユリ科	Liliaceae
キキョウラン	<i>Dianella ensifolia</i> L.	
オキナワサルトリイバラ	<i>Smilax china</i> L. var. <i>kuru sakaguchi</i> ex Yamamoto	
	ショウガ科	Zingiberaceae
ゲットウ	<i>Alpina speciosa</i> k. schum.	

墓の調査

調査の経過

津嘉山森頂上の三角点北西約70mに位置する墓群。

墓は、丘陵斜面の琉球石炭岩転石（俗称メカルシー）の岩陰に形成、転石の法量は、長袖約13m、短軸約6.70m、高さ約8mを計る。平面観は北西～南東に楕円形を呈し、その縁に岩陰墓No1～3が分布する。

調査の概略

岩陰墓 No.1

チカザンヌモーヌ墓。宮城清市（明治45年3月10日生）、具志川市字江洲7番地、^{下門}（屋号）と字赤道の銘刻門中が旧暦3月の神御清明祭の時に拜んでおり、前者は約60年前、後者は約10年前からである。

墓は総門中墓ではなく、^{榎合墓}でウンナー（女系）のガンス（元祖）を祭ってある。法量は、平面の長軸約4.30m、短軸約2.00m、天井高は岩陰内と岩陰開口部とも約1.50mを計る。岩陰に向って左脇から正面は野面積みの石垣で囲われ、部分的に崩れが目立つ。この石積みは関係者によると、戦前まで高さは半分までしか積まれてなく、戦後、全面を被った。



岩陰墓 NO.1 (近景)

墓口はS50°Wに開口、石炭岩を加工して四角の枠を型取ったと思われるが、後世の破損で形は崩れている。墓内には厨子甕が18基確認されたが、銘書の残っているのはなかった。

厨子甕の大雑把な特徴として、形は家型16点、甕型2点、材質はサンゴ石炭岩16点、陶土の焼締め2点。彩色は、蓋と胴部に垂木と柱が描かれ、彫刻は胴部に垂木と柱、蓋には宝珠と^{しん}鯨が掘られている。

岩陰墓 No.2

管理者は不在で無縁仏になっている。墓は転石東面に位置し、岩陰はS55°Eに開口。

法量は、長軸・短軸とも約2.5m、天井高は岩陰内約0.80m、岩陰開口部は約0.30m、岩陰開口部の入口地表面と岩陰内最深部の比高は約1.70mを計る。内部は石炭岩礫が散乱、それに混ざって家型の厨子甕を1基確認（銘書なし）。

岩陰墓 No.3

岩陰墓No.2の北側約1.50mに位置する管理者不在の墓。岩陰は東方向に開口している。

法量は、長軸約1.50m、短軸約0.80m、岩陰内の天井高約1.00mを計る。内部は、甕型の厨子甕が1基確認され（銘書なし）、その周囲は石炭岩礫が散乱。岩陰開口部は野面積みの石垣で囲まれているが、全面を被ってない。

〔図面参照〕

- ①岩陰墓図面(1)～(3)
- ②津嘉山森遺跡付近地形図



岩陰墓 NO.2.3 (近景)



厨子甕の移転

岩陰墓No.1-3の墓から新築墓への厨子甕移転は、関係者によって平成元年12月16日 午後1時~4時に行われ、経過は次のとおりである。

(参加者) 岩陰墓No.1管理者の方々及び協進産業の職員

①岩陰墓No.1の拝み。

墓に向って、帰依祐正住職・浄土真宗本願寺派コザ真宗寺による読経、供物と線香等なし、墓管理者の方々参加せず協進産業の職員のみ合掌。

②岩陰墓No.2とNo.3の拝み。上記と同じ

③岩陰墓No.1の石積み撤去。協進産業と当教育委員会職員数名による。

④岩陰墓No.1内の厨子甕18基に算用数字1~18の番号札を貼り付け。

⑤岩陰墓No.1~3より厨子甕の搬出。墓の番号順に実施。

岩陰墓 No.1 石積み撤去(左の写真)
岩陰墓 No.1 石積み撤去後(右の写真)

⑥新築墓へ搬入する前に、厨子甕の略則と写真撮影を行う。

⑦上記の作業が済みしだい厨子甕は随時、知念大屋久の墓跡西隣の新築墓と、その背後の仮墓(コンクリート枠を転用)へ安置。新築墓へは岩陰墓No.1の厨子甕18基、仮墓には岩陰墓No.2~3の厨子甕2基をそれぞれ搬入した。



岩陰墓 No.2.3 の厨子甕を安置 (仮墓)

岩陰墓 No.1 新築墓(上の写真)
岩陰墓 No.1 新築墓内厨子甕(下の写真)



《主な厨子甕の写真》



Ⓐ



Ⓑ



Ⓒ



Ⓓ



Ⓔ



Ⓕ

Ⓐ～Ⓔ 家型

Ⓕ 甕型

埋蔵文化財の範囲確認調査

調査の概略

津嘉山森遺跡は1970年代初頭の造成工事後に確認された。堀削跡からは、丘陵東面の地層断面（遺物包含層）とその周辺から室川貝塚と同じ年代（約5,000年前）の土器破片、丘陵北西側からはグシク時代（約800年前頃）の土器破片が出土した。

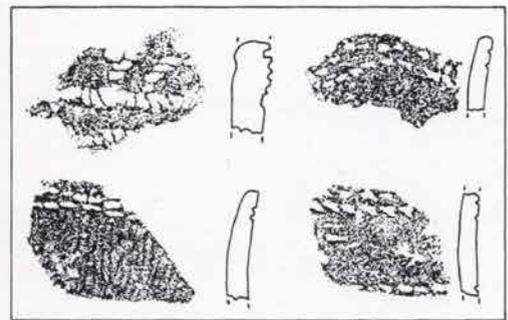
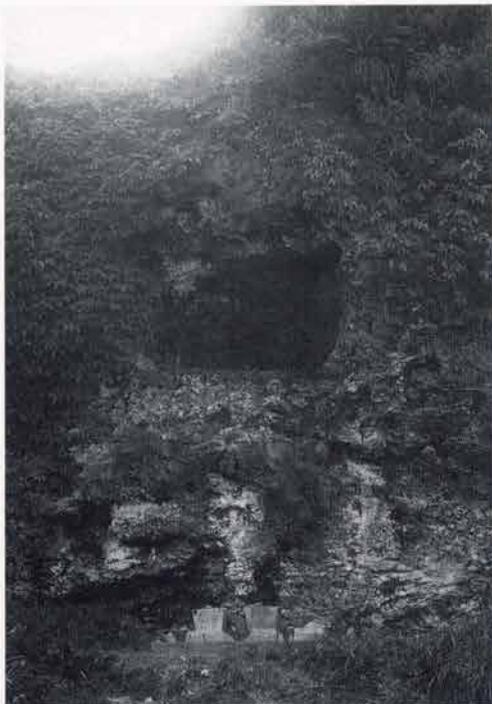
今回の調査は先述のとおり、開発行爲に伴う事業である。申請地が広大な面積を有し、その一画に周知の埋蔵文化財包蔵地が分布するので、開発工事以前に遺跡の取扱いと協議、及び調整のための基礎資料を得る目的で実施した。

試掘期間は昭和63年9月26日～10月6日まで行い、試掘地点は遺物包含層以外の周辺で29ヶ所設定して掘り下げを行い、隣接地の具志川市地内では、具志川市教育委員会によって10ヶ所の試掘が行われた（具志川市教育委員会 大城剛氏の調査メモより）。

試掘穴の規模は1～4m四角を呈し、当地一帯のクチャ（基盤土層）に達するレベルは、浅いのが20～50cm、中間170～250cm、最も深いのは約370cmを計り、39地点いずれも遺物の出土する包含層は確認できずに基盤土層に至った。

〔図面参照〕

①津嘉山森遺跡付近地形図



遺跡より表面採集の土器

遺跡の近景

←この断面が土器を含む地層

あ と が き

本概報は、開発行為に伴う埋蔵文化財の範囲確認調査を中心に、その外の文化財も合わせて紹介した。

発刊に至るまで、資料整理及び原稿執筆、文化財の調査、開発側との調整と協議等の経過が逆算され、足掛け5ヶ年を要した。この5年間にも景観は変わり果て、更に20年以前の造成前の当地を知る人々からは、津嘉山森の頂上付近が僅かに残っている事で、かろうじて痕跡が確認できるほどである。

度重なる開発で地形が虫食い状態が変わりつつある最中に、調査を実施した。残念な事は、この一帯の開発が手付かずの時に行っていたならば、今回試みた数々の文化財の成果が、かなり期待できたのではないかと痛感される。

最後に、調査その他、諸々の分野でご協力を賜った方々のご苦勞に対し、心から厚く感謝申し上げます。

《協力者》（五十音順・敬称略）

・植物調査

沖縄野外植物研究会

伊波善勇／伊礼洋代／池原直樹
兼城洋邦／渡嘉敷玲子

・墓調査

写真測量と図化

株式会社 エス・テック

写真測量と図化の予算

株式会社 協進産業

墓移転に伴う調査

下地傑／宮里実雄／宮城清市
与那嶺豊

・拓本調査

稲嶺和江／新屋義博／波平裕子
宮城昭美

・埋蔵文化財の範囲確認調査

沖縄市シルバー人材センター
具志川市教育委員会

《調査組織》

・調査主体

沖縄市教育委員会

・調査員

恩河尚／宮里信勇／宮城利旭

・資料整理、原稿執筆及び編集

津嘉山森の植物……………池原直樹
図面整理……………比嘉賀盛
津嘉山森関係の伝承……………宮城昭美
編集及び上記以外の執筆……宮城利旭



岩陰墓群 No.1~3 平面図

Y = 3333.00 +

X = 37629.00

凡例

-----	墓室
———	下場の輪郭

+ Y = 3333.00

X = 37637.00



頂点、EL86.05^m —

EL84.00 —

石炭岩

EL80.00 —

A —

墓庭 岩陰墓 No.1

— A'

A - A' 断面図

頂点 EL86.36^m —

EL = 84.00 —

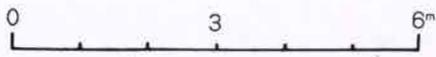
石炭岩

EL = 80.00 —

岩陰墓 No.2

B - B' 断面図

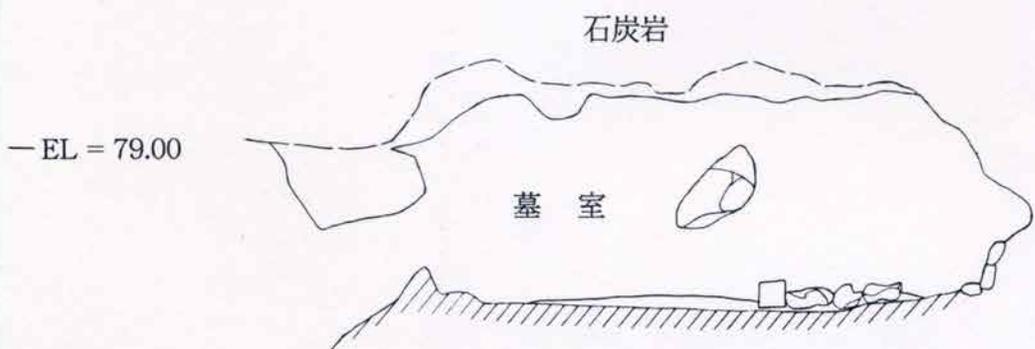
— B'



岩陰墓図面 (1)



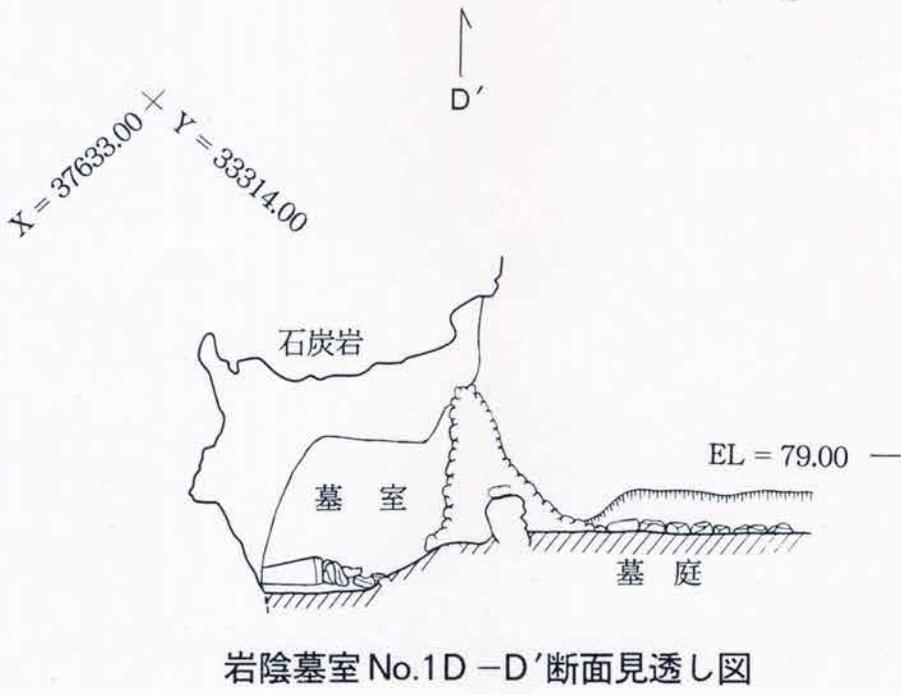
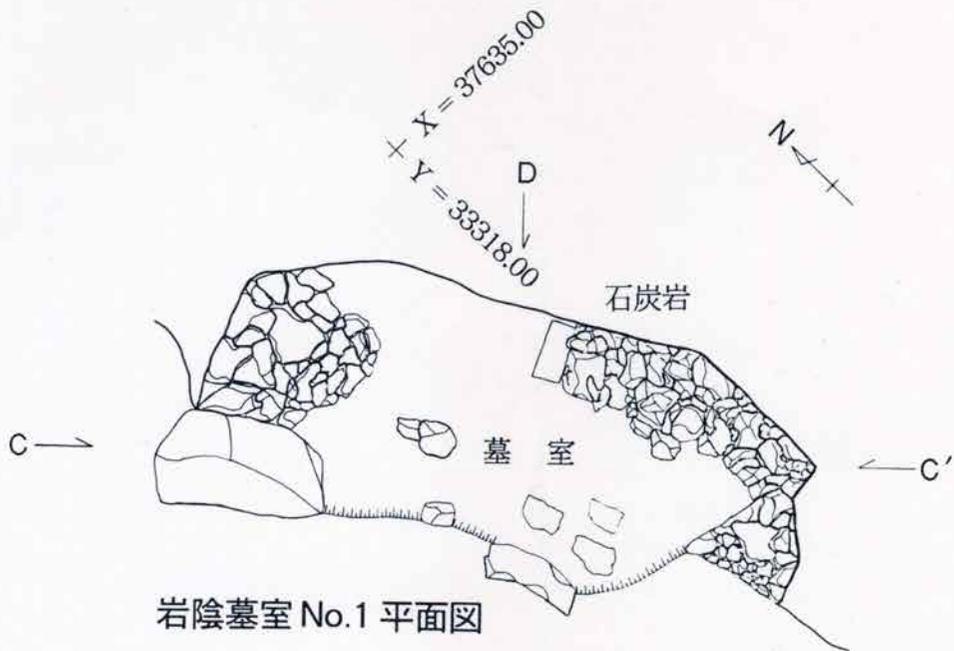
岩陰墓 No.1 正面図



岩陰墓 No.1 正面石積み撤去(C-C'見透し図)

凡例

-----	墓室
-----	石炭岩縁



3m

岩陰墓図面 (2)

— EL84.00^m



石炭岩

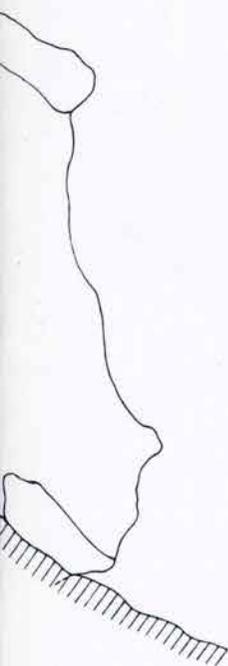
岩陰墓 No. 3

岩陰墓 No. 2

— EL8000

岩陰墓 No. 2.3 正面図



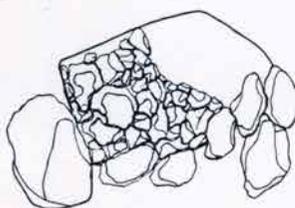


+

Y = 33322.00

X = 37633.00

石炭岩



岩陰墓室 No.3 平面図

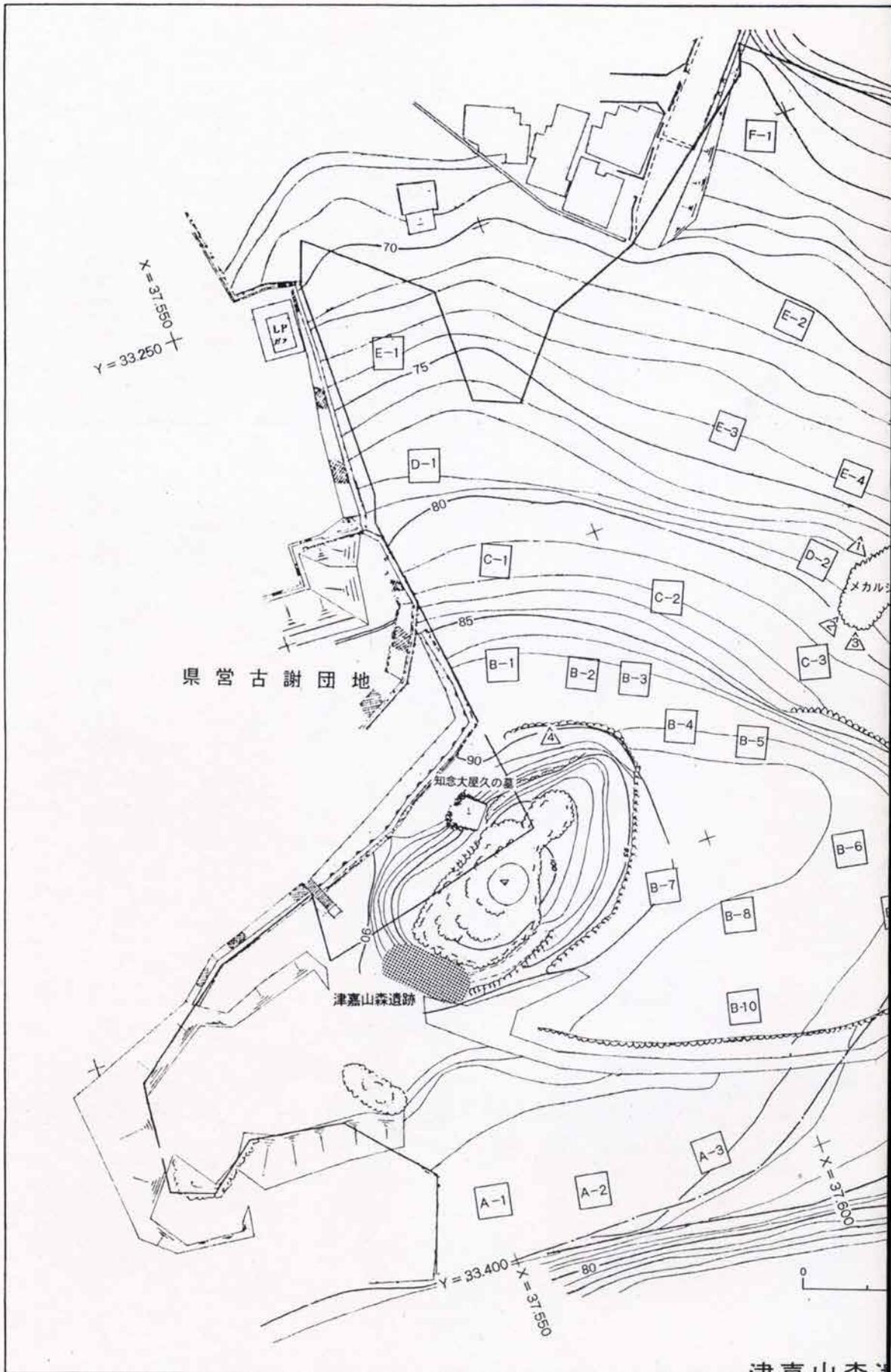
Y = 33326.00

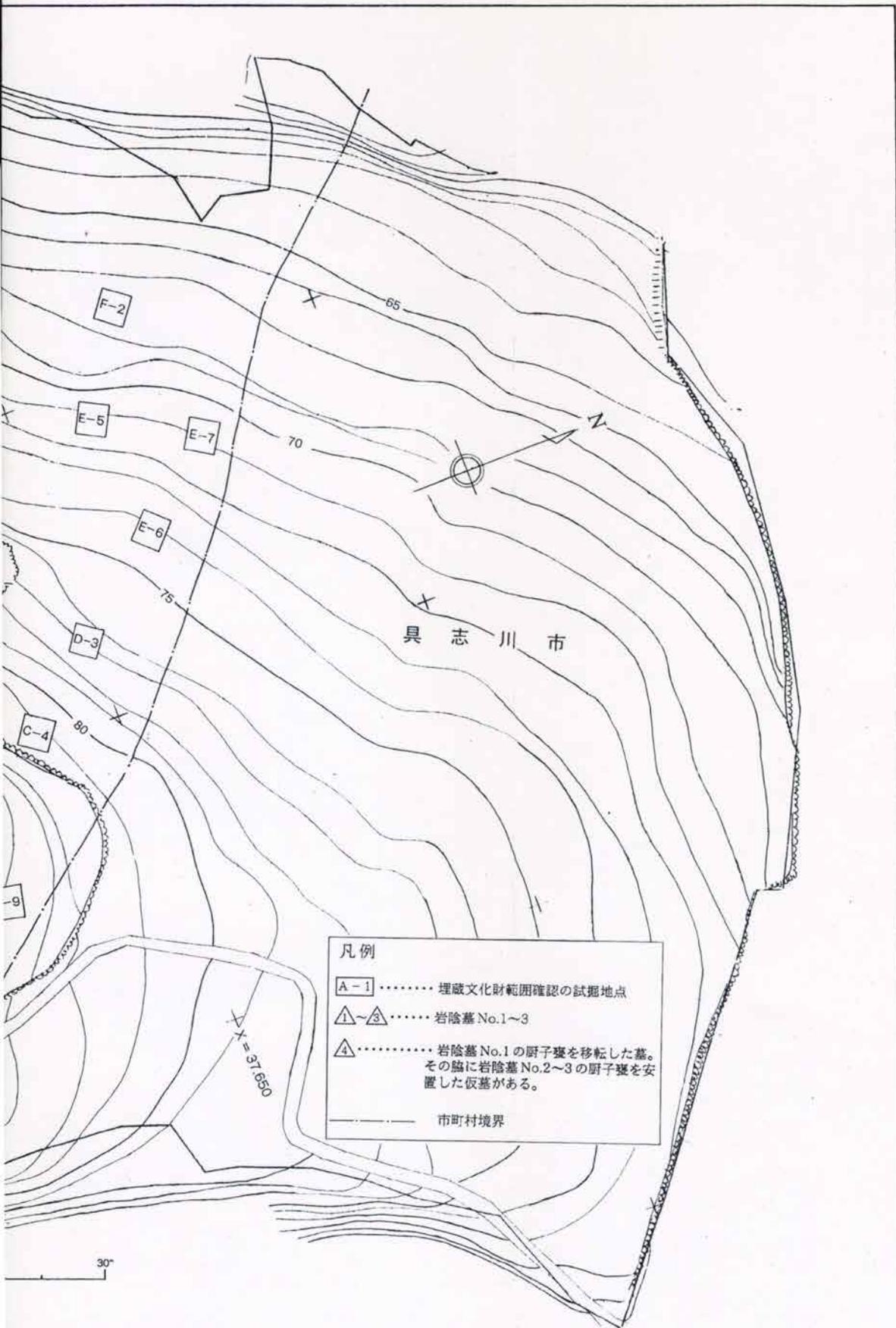
X = 37629.00

+

5m

岩陰墓図面 (3)





- 凡例
- A-1 埋蔵文化財範囲確認の試掘地点
 - ①~③ 岩陰墓No.1~3
 - ④ 岩陰墓No.1の厨子甕を移転した墓。
その脇に岩陰墓No.2~3の厨子甕を安置した仮墓がある。
 - 市町村境界

30m

津嘉山森遺跡

—文化財調査概報—

沖繩市文化財調査報告書第13集

1992年2月10日印刷

1992年3月31日発行

発行 沖繩市教育委員会
沖繩市字美里1100番地

編集 沖繩市立郷土博物館
〒904 沖繩市字上地235番地3
TEL 932 - 6882

印刷 海邦堂印刷
TEL 933 - 1341